

吉野ヶ里(神埼郡吉野ヶ里町)(百名城)(吉野ヶ里歴史公園)

吉野ヶ里遺跡(よしのがりいせき)は、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町と神崎市にまたがる吉野ヶ里丘陵にある遺跡。およそ 50 ヘクタールにわたって残る弥生時代の大規模な環濠集落(環壕集落)跡で知られる。物見やぐらや二重の環濠など防御的な性格が強く日本の城郭の始まりとも言えるものであり、1986 年(昭和 61 年)からの発掘調査によって発見された。現在は国営吉野ヶ里歴史公園として一部を国が管理する公園となっている。

2006 年(平成 18 年)4 月 6 日、日本 100 名城(88 番)に選定された。

佐賀県東部は、福岡県境に標高 1,000 メートル前後の脊振山地を北端に、脊振山地南麓の丘陵地帯、佐賀平野(筑紫平野)、有明海へと移るにつれて標高が低く、南に開けた地形となっている。吉野ヶ里丘陵はこの脊振山地南麓の丘陵地帯の 1 つである。

吉野ヶ里遺跡の最大の特徴とされるのが集落の防御に関連した遺構である。弥生時代後期には外濠と内濠の二重の環濠ができ、V 字型に深く掘られた総延長約 2.5 キロメートルの外濠が囲んでいる範囲は約 40 ヘクタールにもなる。濠の内外には木柵、土塁、逆茂木(さかもぎ)といった敵の侵入を防ぐ柵が施されていた。また、見張りや威嚇のための物見櫓が環濠内に複数置かれていた。大きな外濠の中に内濠が 2 つあり、その中に建物がまとまって立てられている。北の集落は北内郭、南の集落は南内郭と命名されている。内郭の内外に建物の遺構が発見された。竪穴住居、高床住居は祭祀に携わるものやその側近が暮らしていたと考えられており、祭祀が行われる主祭殿、東祭殿、斎堂とともに内郭の中で見つかった。また、食料を保管する高床式倉庫、貯蔵穴、土坑、青銅器製造の跡なども発掘された。

多数の遺体がまとまって埋葬された甕棺、石棺、土坑墓は、住民や兵士などの一般の人の共同墓地だと考えられている。一方、遺跡の南部と北部にあわせて 2 つの墳丘墓(それぞれ「北墳丘墓」「南墳丘墓」と命名されている)があり、こちらは集落の首長などの墓ではないかと考えられている。発掘された甕棺の中の人骨には、怪我をしたり矢じりが刺さったままのもの、首から上が無いものなどがあり、倭国大乱を思わせる戦いのすさまじさが見てとれる。また、ガラス製の管玉などの装飾品と一緒に埋葬されたものも多く見つかった。

多数の土器、石器、青銅器、鉄器、木器が出土している。勾玉や管玉などのアクセサリ類、銅剣、銅鏡、織物、布製品などの装飾品や祭祀に用いられるものなどがある。1998 年には、九州で初めてとなる銅鐸が遺跡の周辺部で発見された。九州北部で製造されたと推定されており、形状から福田型銅鐸とみられている。

出土した遺構や出土品には、九州北部をはじめとした日本各地のものと共通・類似した特徴を持ったものが見られるほか、中国大陸、朝鮮半島、南西諸島ともさまざまな面で共通性・類似性が見られる。

また、遺跡内にある 3 基の前方後方墳は、弥生時代の集落が消滅した跡に造られたと考えられている。

Wikipedia による

